

4 民主化・分権化時代と企業家知事の誕生

——インドネシアの辺境から——

岡本 正明

新たな地方行政のきざし？

「自治体運営は企業経営と同じだ」。こんな発想をする州知事がインドネシアに誕生した。一九九八年から民主化・分権化が始まったからこそ、そして、自治体を「経営」するという発想がアメリカを中心として世界に流布したからこそ生まれた新しいタイプの知事である。名前はファデル・ムハマド、ゴロンタロ州知事である。一九五二年マルク生まれで、名門バンドン工科大学を卒業し、ビジネスの世界で頭角を現した後、中央政界に進出していった人物だ。

ゴロンタロ州は、見るべき産業がない人口九〇万人あまりの小さな州である。二〇〇〇年に北スラウェシ州から分離して誕生した。ムスリムが人口の九割近くを占めるインドネシアにあつて、北スラウェシ州は例外的にキリスト教徒が多数派の地域である。そうした州にあつて、ゴロンタロ地方はムスリムが圧倒的多数の地方であつたし、しかも州都マナドから車でゴロンタロ地方の中心まで八時間もかかった。それゆえ、州知事は当然、キリスト教徒であり、経済成長の中心もマナドとその周辺に偏り、ゴロンタロ地方は継子扱いされていた。ゴロンタロ地方生まれの若者はジャカルタではゴロンタロ出身と言うのを恥ずかしかつたし、ゴロンタロという地方を知っているジャカルタ人などほとんどいなかった。九八年に開発独裁体制が倒れ、自由な政治空間が拡大したとき、ゴロンタロ出身の若者たちが中心となつて、ゴロンタロ州設立を目指し、二〇〇〇年にその夢を実現した。

その若い州の初代知事に就任したのがファデルである。ファデルは全国レベルで知名度の高い政治家、企業家で



コーン収穫に参加するファデルムハマド（右）。

あり、両親がゴロンタロ人とは言え、州設立には全く関心すら示していなかった。しかし、彼が言うには、「（ゴロンタロを故郷とする）母親の助言を受けて」州知事になることを思い立った。州設立を支持した若者たちも強くファデル支持を打ち出した。ゴロンタロ地方で第一党であるゴルカル党は別候補擁立を画策したものの、ジャカルタの党本部がファデル擁立を決定した。その結果、州議会議員による選挙で容易にファデルは州知事に収まった。

就任早々、彼は自らを「企業家知事」（Entrepreneurial Governor）と呼び、ゴロンタロ州を「企業家精神に富んだ州」（Entrepreneurial Province）と名付けた。企業家として成功した自負があるからこそ、「自治体Ⅱ企業」という発想を持つことができた。選任と集中が重要であるという理解のもと、トウモロコシを軸に地域おこしを狙うアグロポリタン構想をぶちあげた。加えて、漁業振興、人材育成を重要プログラムに定めた。彼がこうした急進的変革を目論めたのは、彼が外部者であり、地元の利権から自由であったことも大きい。

ファデルはとりわけコーン生産拡大に力を入れた。コーン生産量を二〇〇一年就任当初の七万から二〇〇六年には一〇〇万トンに増やすと公言したファデルは、最低買取価格を設定し、農民グループ、低利融資制度などを作り上げた。「ひたすらコーンと言いつづければ人はついてくる」と豪語して、あらゆる人に「ゴロンタロ州Ⅱコーン」というイメージを植え付け、同時に自らを積極的に売り出した。

メディアに頻繁に登場し、住民との対話を積極的に行った。演説はうまく、人の批判にも耐える精神力があり、自分を演出する術も心得ている。会議場に入ればテレビカメラの位置を確認して、自分の見え方、撮られ方を気にする。中央政府高官が来れば、トウモロコシ畑を訪れて一緒に収穫をする。そ



ファデルを賞賛する伝記。

得したさまざまな賞の数は三四にも達した。そして、コーン生産高は二〇〇五年現在で約四〇万トンまで伸びた。

こうした成果を誇示したファデルは州内では政治的には無敵状況になった。二〇〇六年一月に初めて行われた住民投票による州知事選挙では、全国の州知事選挙史上最高の得票率八二パーセントで再選された。

ファデルの真意

ただし、ファデルの主張は鵠呑みにできない。確かにコーン生産は増えているものの、環境への影響は等閑視されており、あちこちの山頂にまでコーンが植え付けられている。コーンの流通・販売を握る業者が利益を上げる一方、彼らから種子を買い付け、生産物を売る小農の収入は増大したのか疑問である。しかし、こうした負の側面は見えにくい。その理由は、ファデルが示すデータと成果を批判的に分析しうるだけの強靱な市民社会が育っており、地方メディアは取り込まれて自治体行政にあまり批判的でないからだ。

ファデル自身はますます自信を強め、二〇〇七年にはインドネシアの名門ガジャマダ大学で公共政策の博士号を優秀な成績で取得した。博士論文のタイトルは「自治体パフォーマンズへの企業家的経営能力が果たす役割の重要

の記事と写真が地方紙の一面に踊り、「アグロポリタン」なるタブロイド紙も発刊する。国営ラジオ放送局のゴロンタロ支局に十分な自治体予算をつける見返りに、毎日の彼の活動を流させた。さらに、中央政官界とのネットワークを駆使し中央予算を分捕ってくる。こうして「ゴロンタロ＝ファデル＝コーン」という連想が作られ、ファデルは中央政府から食糧保障への貢献を評する賞を受けるまでになった。州知事に就任してから六年間の間にファデルあるいはゴロンタロ州が獲

性…ゴロンタロ州の事例」であり、まさに自らの「成功」経験を博士論文に仕立てたのである。そして翌年にはインドネシア語の本でありながら *Reinventing Local Government* (自治体の改革) という英語のタイトルで商業出版にこぎ着けた。そして、彼の関心は「再び」中央政界に向かっていった。

そもそも、ファデルは田舎のゴロンタロで一週間の大半を過ごしているわけではなかった。首都ジャカルタに自らのオフィスを持っており、そこで過ごす時間が長く、ジャカルタの政官界ネットワークの維持には余念がなかった。二〇〇九年大統領選挙の時には、ジョグジャカルタのスルタン、ハメンクブウォノが出馬を考え始めると、ファデルはその副大統領候補になることに色気を見せた。スルタンが出馬をあきらめた後、世論調査で現職のユドヨノ大統領再選の可能性が高いことから、早々にユドヨノ再選支持を表明した。そして、予想通りユドヨノが大統領選で圧勝すると、ファデルには海洋水産大臣のポストが与えられた。地方でのパフォーマンスを武器に中央政界に復帰するというのは、地方の実情をより正確に中央政界に届ける機会ともなり良いことである。ゴロンタロ州にすれば、ファデルは中央政府の予算を同州に引っ張ってくるための橋渡し役になってくれる可能性だってある。

ファデルの大きな貢献の一つは、北スラウェシ州の一部でしかなく、ほとんど知名度のなかったゴロンタロという名前をコーンを通じて全国的に広めたことである。大臣にまでなったファデル自身がゴロンタロ州に舞い戻る気などさらさらない。彼の後を継いだ地元出身の現職副知事はファデルの地域開発プログラムの継続を主張している。しかし、彼は経営能力も、そしてパフォーマンス能力もさしてないことから、地元の利権にからみ取られて身動きが取れなくなってしまうかもしれない。本当の意味でのゴロンタロ州の発展はこれから始まるうとしている。私の知る限り、その主役は、ゴロンタロ州設立を目指した若者たちである。希望はある。